

私はこうして

牧草の夏枯を防いだ

佐藤栄光

で、過去一か年の成績をお話して御参考に供したいと存じます。

私の部落は岩手県と宮城県との県境に位置し北上水系に沿つた、沖積層の水田單作地帯で、以前は毎年のよう年に大水害を蒙り、収穫皆無の年もたまたまありましたが、現在は堤防も強化されましたので、水田裏作も行われ、乳牛の導入も漸次ふえ、綠肥利用地と飼料自給が目されて来ましたけれども、期待された酪農も思うように進まず、乳牛の能力を十分發揮させかねてている状態であります。

そこで私は、最高の農業形態であると考
えられる酪農を、水田単作地帯に完成する
ためにいわゆる水田酪農という立場から地
力の増進と、飼料の自給とを目的に、価値
の高い牧草を取り入れた水田輪作が必要であ
ると思いましたので、殊に飼料の夏枯にも
備え得るためにはどうしたらよいかといふ
観点から、

一 牧草の灌水栽培の効果 一 牧草栽培に磷酸はどういう効果をあ

らわすか

一 夏枯れ防止にかぶの有効な利用はな

の三つについて、試験調査を初めました。

無灌水区 三〇年、三一年の結果から見
ますと、土際から刈取ると伸びが悪くなる
ばかりでなく、刈取回数を重ねるにしたが
つて収量が減じて来ました。

当地は七月初めより九月の中頃まで平均温度二五度前後の気温を保ちまして、七〇日から八〇日の高温続きが毎年のようになります。

大きな理想的な農業を夢みて始まつた酪農も、牧草という牧草は日照りのために伸びが悪く、他方から高価な濃厚飼料を買うような姿であります。

当部落は水源に恵まれてゐる。この水源を何んとかして飼料畑に利用して、夏枯のない弾力性のある當農を行いたいという点から、牧草の灌水試験を三〇年度、三一年度の二カ年に亘つて研究を始めたのであります。

当地は七月初めより九月の中頃まで平均温度二五度前後の気温を保ちまして、七〇日から八〇日の高温統計が毎年のように統べてあります。

大きな理想的な農業を夢みて始まつた酪農も、牧草という牧草は日照りのために伸びが悪く、他方から高価な濃厚飼料を買うのが、なかなか姿であります。

当部落は水源に恵まれてゐる。この水源

当部落は水源に恵まれてゐる。この水源を何んとかして飼料畑に利用して、夏枯のない弾力性のある富農を行いたいという点から、牧草の灌水試験を三〇年度、三一年度の二ヵ年に亘つて研究を始めたのであります。

その結果を図表を持ちまして御説明します。

無灌水区 三〇年、三一年の結果から見

ますと、土際から刈取ると伸びが悪くなる

ばかりでなく、刈取回数を重ねるにしたがつて収量が減じてきました。

(註) 灌水区は無灌水区と比べると収穫が4~6日早い、収量は1,000貫の増加が出来た。

2寸以上残して刈ると伸びが良いが牛が好まない。

で牛があまり好まないが、伸長度は早い。

二 燃酸の施用と収量との関係

牧草の栽培には現在までは窒素質の肥料だけを問題にして来ていましたが、あまりにも燃酸問題を考えていなかつた。私は牧草の増産を計るには、まず根を作らなければという考え方で、燃酸の施肥によつてどれだけの収量を左右するかという小さな思いつきから、研究を始めたのであります。

その結果をまだ一年だけでの試験であります、中間報告の型においてお話し、今後の御参考に供したいと思います。

ます、中間報告の型においてお話し、今

備考 面積 五畝歩	草丈 (茎cm)	生草収量 三貫貫	乾草収量 二九貫貫	比 率			
				P O ₂ 無区	P O ₂ 一貫区	P O ₂ 二貫区	P O ₂ 三貫区
刈取 試験前 二回	六・二	二〇	一七	100%	一貫区	二貫区	三貫区
刈取 試験中 二回	過燃酸石灰一六・五%	一七	一六				
播種期 現在	三〇年九月下旬 五寸	一五	一五				

備考
面積
五畝歩
刈取
試験前
二回
刈取
試験中
二回
播種期
現在
五寸
試験日
三一年七月一日
九月三〇日

最後に夏かぶの栽培方法について申上げますが、大麦を収穫後直ちに雪印改良紫かぶを播種し、収穫が八月上旬でありますので、牧草の夏枯時に美味で多汁なかぶを家畜にあたえることができ、泌乳量の減退を防止するのに好適なものと考えます。しか

もこの跡にすぐ石灰を撒布して秋かぶを播種できますので一年三毛作ということになります。

以上の粗飼料を主体にしまして、四六石の牛乳を生産することができました。

今後もなお一層研究を重ねて反位当の生

産量を高めたいと思ひます。

* 播種六月九日、畦幅二尺、株間七・八寸、中間除草七月一四日間引六月二〇日、施肥(五畝)堆肥二五〇貫、N₁五〇貫、P₃五〇〇貫、追肥牛尿(三回)二石収穫八月上旬。

本稿は、北日本酪農青年研究連盟主催の第九回発表会において東北代表として優秀賞を得せられた、佐藤栄光氏の体験発表要旨であります。草に対する熱心なる研究心に深く敬意を表すると共にひろく酪農に励む同志の方々に御紹介申上げる次第であります。

本稿は、北日本酪農青年研究連盟主催の第九回発表会において東北代表として優秀賞を得せられた、佐藤栄光氏の体験発表要旨であります。草に対する熱心なる研究心に深く敬意を表すると共にひろく酪農に励む同志の方々に御紹介申上げる次第であります。

酪農小知識二題

◆牧草の栽培着眼点

一 品種の選定 牧草類は普通作物と同様に、気候土質によつて、その適応性が異なるからその選定に当つては放牧、採草あるいは兼用としての利用目的および利用年限にあつた最も有利な品種を導入しなければなりません。

放牧用の牧草としては、白クロバード、ラズノクロバード、ペレニアルライグラス、ブロームグラス等、採草用の牧草としては、チモシー、イタリアンライグラス、リードキャナリーグラス、ルーラン、スイートクロバード、アルサイククロバード、兼用の牧草としてはオーチャードグラス、メドウフェスク、赤クロバード、アルサイククロバード等があります。

二 播種期 寒地では六月まで、道中南部では八月上旬頃まで、遅播は冬損が多い。

三 施肥 塵科牧草の多い場合は、堆肥五百貫、過石五・六貫、硫安一貫、加里一・二貫、炭カル三十貫、木本科牧草の多い場合は堆肥四・五貫、過石五

貫、硫安三・四貫、炭カル三十貫。

四 管理 新播牧草地の掃除刈り行、麦類等と混播した牧草は主作物刈取後畜尿、堆厩肥、厩汁の撒布又は金肥の施用、早春萌芽前の追肥勧行(木本科の多くは草種割合の一番多い牧草の収穫適期に刈取ります。放牧、採草は必ず牧草の根元から三寸位を残すようにしましょう)。

◆草地利用の適正

従来採草地や放牧地は、慣習で殆ど無計画に利用されていることが多いものですが、草地の草生維持のためにもぜひ適正利用をするようにして下さい。

採草の場合一般に遅刈の傾向があり、それだけ良質の草を得ていいよいです。

又遅刈ると二番草の収量が減りますのでぜひ適期に刈取るようにして下さい。

刈取回数は地域の気象条件や土地の肥瘠によつて違いますが、草生維持のためには普通地で肥培管理が長く行われる場合でも二回刈、肥沃地でも三回刈を行つ場合には、草生維持のため相当の肥培管理が必要です。又刈取の場合には必ず根元から三寸前後残すようにして下さい。土のきわから刈取ると草生を悪くし荒廃を早めます。

放牧の場合従来まで同一の草地に全期間放牧する場合が殆どでした。が、このままになりますと、放牧地が早く荒廃し、家畜の能力にも大きな影響を与えるようになりますから、絶対に改めて草地は必ず数区に区分して、順次輪換放牧をするようにして下さい。又放牧開始は草丈が六・七寸位まで伸びてから実施して根元から三寸前後を食残す程度に放牧管理を行いましょう。

「牧草と園芸」六月号は秋季飼料特集号として、内容を充実し発行致す予定であり、その発送が例月より若干遅れますので(六月中旬発行予定)お含みのうえ何卒お待ち願います。